



表面



裏面

口絵 1 行基墓誌断片



表面



裏面

口絵 2 二月堂本尊光背断片

行基墓誌断片を考える — 東大寺二月堂本尊光背断片との比較から —

吉 澤 悟

はじめに

行基墓誌断片は、奈良時代の高僧、行基にかかわる直接的かつ唯一の遺品として広く知られている。僅か一〇cm余りの銅片に十八文字の刻銘が残る小さな遺品であるが、大正年間の発見以来、多くの先学がこの墓誌断片について関心を寄せ、行基の事績はもとより、奈良時代の仏教史を語る際にもしばしばこれが紹介されている⁽¹⁾。銘史料としてすでに大方は語り尽くされた感があるものの、銅製品としての質についてはいまだ詳しく報告されたことはない。本稿では、この墓誌断片の詳細な観察や成分分析など、徹底したモノの検討を行い、それをもとに行基墓を造った集団やその造営理念について考えてみようと思う。なお、検討にあたっては、同時代資料として東大寺二月堂本尊光背の断片を取り上げ、比較対照することにした。同断片は当館蔵品であるが、これまで単独公開の機会もなかったため、資料紹介を兼ねておきたい。

1、行基墓誌断片の来歴と概要

(1) 行基墓の発掘

行基墓誌断片の観察に入る前に、まずは行基の墓所について簡単

にまとめておく。行基が亡くなったのは天平二十一年(七四九)二月二日の夜であった(『大僧上舍利瓶記』。3頁参照)。右京の菅原寺(現在の奈良市喜光寺)において、釈迦の涅槃のごとく右脇を下にして臨終を迎えたという。二月八日には生駒山の東麓で荼毘に付されたが、それは本人の遺言に従ったものであった。弟子たちが悲しみに悶える中、行基の遺骨は瓶に納められ、それを埋めた山上を結界し、「多宝塔」に見立てて礼拝の対象としたという(実際に塔を建てたと解する場合もある)。行基の墓所とした生駒山の東麓とは、現在の生駒市竹林寺の境内地にあたるが、鎌倉時代、文暦二年(一二三五)にはその墓所が発掘されている。その顛末は『生駒山竹林寺縁起』に詳しい。すなわち、墓所発掘の前年、天福二年(二三三)六月から慶恩なる僧侶に行基本人からの託宣があり、人々の信心が衰えていることを嘆き、自らの墓所を開いて信仰を復興するよう命じてきた。これを怪しむ人々に対して、行基の母親が託宣に登場したり、慶恩の室内に白煙が立ち込める「奇瑞」が起きたり、ひいては不信が続けば隣里を焼き払うと行基が恐喝めいた託宣を下すなど、たびたびの督促がなされた。相談を受けた僧寂滅⁽⁴⁾は天皇への奏聞を提案するが、それを行う間もなく託宣が指定してきた期日となり、人々は墓所の開削を始めてしまった。結果、地下から八角の石筒が発見され、こ



写真1 『大僧上舍利瓶記』（奈良・唐招提寺）

れを開くと中に銅の筒が入っていた。銅筒には二面に鎖がかけられ、その一方に鑰（錠前）が付いていたという。これを開くとさらに銅の筒が入っており、筒面には銘文があつたので、それは別紙に書き写して添付した（これが『大僧上舍利瓶記』（写真1）。その中には銀の瓶があり（注口のない水瓶のような形

器が水瓶形なのは、『大般涅槃經』で釈迦の遺骨を「瓶」に納めたとあることに因んだ選択であろう。現在に残る行基墓誌断片は、銘文のある銅筒に対応するので、舍利瓶を直接収納した一重目の外容器であつたと分かる。

ところ、行基は文殊菩薩の生まれ変わりとの信仰が早くから広まっており、その本人の舍利がこの世に表れたことは一種の奇瑞と受け止められた。そのため、舍利瓶は発掘の翌年、嘉禎二年（二二二六）に京都に運ばれ開帳され、また、正嘉三年（二二五九）と弘長元年（二二六二）、同三年（二二六三）の三回にわたり東大寺大仏殿において律僧らの供奉により盛大な舍利供養が行われている⁽⁸⁾。東大寺の凝然が著した『竹林寺略録』（唐招提寺藏。鈴木學術財団一九七二）によれば、その後、墓の場所には塔廟が建てられ、中に行基の舍利瓶や外容器を納め、中心には文殊菩薩像を安置したという⁽⁹⁾。この塔以外にも灌頂堂や鐘を備えた中門、食堂や湯屋などを備えた伽藍が整備され、「大聖竹林寺」と号して栄えた。しかし、明応七年（二四九八）八月、興福寺大乘院方の古市氏と、これに対立する一条院方の秋篠・宝来の衆徒の間で起きた合戦により、竹林寺は炎上してしま⁽¹⁰⁾う。被害の大きさは不明であるが、この時の火災によって堂塔の多くが焼失し、行基舍利瓶と外容器も燃えてしまったと思われる。現在のような断片となつたのはこの時であろう。さらに明治の廃仏毀釈が追い打ちをかけるように残りの堂宇を棄却してしまい、行基に

関わる遺品や遺構はすべて不明となつてしまった。唯一、現在の行基墓誌断片が地元在住の個人の元に伝わっており、大正三年（一九一四）の報告で世に知られ（水木一九一四）、昭和二十九年（一九五四）に奈良国立博物館がこれを買取り、現在に至っている。

だつたという）、蓋に瓔珞を懸け、頸には「行基菩薩遺身舍利瓶」と書かれた銀の札が下げられていたという。

この記録から、行基墓所の地上には明確な建築物はなく、地下に八角石筒を外容器として、二重の銅筒を納め、その中核に水瓶形の銀の舍利容器（骨藏器）を安置していたことが分かる。なお、舍利容

原文

①大僧上舍利瓶記

②和上法諱法行一號行基藥師寺沙門也俗姓高志

③氏厥考諱才智字智法君之長子也本出於百齊王

④子王爾之後焉厥妣蜂田氏諱古爾比賣河内國大

⑤鳥郡蜂田首虎身之長女也近江大津之朝戊辰之

⑥歲誕於大鳥郡至於飛鳥之朝壬午之年出家歸道

⑦苦行精勤誘化不息人仰慈悲世稱菩薩是以天下

⑧蒼生上及人主莫不望塵頂禮奔集如市遂得 聖

⑨朝崇敬法侶歸服天平十七年別授太僧正之任竝

⑩施百戸之封于時僧綱已備特居其上雖然不以在

⑪懷勤苦彌厲壽八十二年二月二日丁酉之夜右

⑫脇而臥正念如常奄終於右京菅原寺二月八日火

⑬葬於大倭國平群郡生馬山之東陵是依遺命也弟

⑭子僧景靜等攀號不及瞻仰無見唯有碎殘舍利然

⑮盡輕灰故藏此器中以爲頂礼之主界彼山上以慕

⑯多寶之塔

⑰天平廿一年歲次己丑三月廿三日沙門真成

訓読

①大僧上（正）舍利瓶記

②和上の法諱は法行なり。一に行基と号す。薬師寺の沙門也。俗姓は高志

③氏なり。厥の考の諱は才智といい、字は智法君というものの長子也。本は百済の王

④子王爾の後なり。厥の妣は蜂田氏にして諱は古爾比売といい、河内国大

⑤鳥郡の蜂田首虎身の長女也。近江大津の朝の戊辰の

⑥歳、大鳥郡に誕す。飛鳥の朝の壬午の歳、出家して道に帰し、

⑦苦行精勤し、誘化して息まず。人は慈悲を仰ぎ、世は菩薩と称す。是を以て天下の

⑧蒼生は、上は人主に及ぶまで、塵を望み頂礼せざるなく、奔り集まりて市の如し。遂に聖

⑨朝の崇敬を得て、法侶は帰服す。天平十七年、別けても大僧上（正）の任を受け、竝びに

⑩百戸の封を施す。時に僧綱は已に備わり、特に其の上に居る。然りと雖も以て

⑪懐うところを在らず。勤苦し弥厲む。寿八十二にして、廿一年二月二日丁酉の夜、右

⑫脇にして臥し、正念すること常の如く、奄に右京の菅原寺に終る。二月八日、

⑬大倭國平群郡生馬山の東陵に火葬す。是れ遺命に依る也。弟

⑭子の僧景靜等は攀号するも及ばず、瞻仰すれども見るもの無く、唯だ碎け残れる舍利有るのみなり。

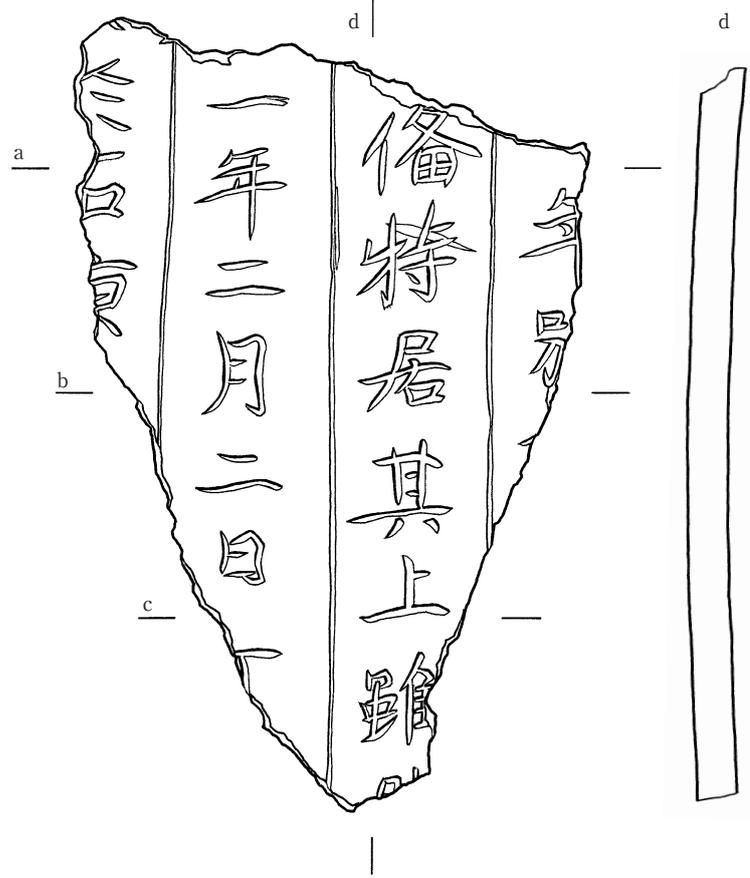
⑮然（燃）え尽きて軽き灰なり。故、此の器中に藏め、以て頂礼の主と為し、彼の山上を界し、以て

⑯多宝の塔に慕す。

⑰天平廿一年歳は己丑に次る三月廿三日 沙門真成

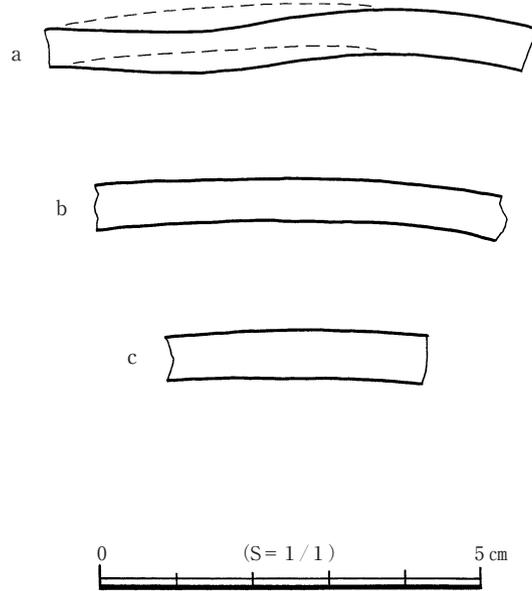
※各行上の番号は『大僧上舍利瓶記』の行数を表す
※全文および訓読は『行基事典』（井上（編）一九九七）

を引用。ただし、文字配列は図5（藤澤一九五六）に従った



(2) 墓誌銘文

寂滅により書き写された銅筒の銘文は、『大僧上舍利瓶記』として唐招提寺に伝わっている。その全文はすでに各書で紹介されており、⁽¹¹⁾墓誌断片の文字配列を参考におよそ一行に二十字の割合で記されていたことが復元されている(石田ほか 一九三七)⁽¹²⁾。前頁に全文を掲げたが、その後段部分には、行基の遺命により生駒山の東麓で火葬したことや、墓所を「多宝の塔に慕す」という記述、あるいは景静や真成など行基の弟子たちの名前が見える。これらは行基の墓所構造や行基集団を考える上で特に注目される部分である。



2、行基墓誌断片の詳細

行基墓誌断片は、縦一〇・七cm、横六・八cm、厚さ五・八mm、重量一八六・〇gをはかる、逆三角形の厚い銅板片である(図1)。表面は滑らかで、轆轤挽きによる研磨痕が僅かに残り、鑿で罫線と文字が刻まれている。当初は鍍金が施されていたはずであるが、肉眼では一部に微かに見られるだけで、目立つ金属光沢は銅の地金に因むものである。裏面は全くの未加工で、轆轤で成形した鋳型の粗い肌が写されている。先述のように、本品は銀製の舍利瓶を直接収納していた「銅筒」、すなわち円筒形容器の一部なので、表面には軽い

図1 行基墓誌断片 実測図

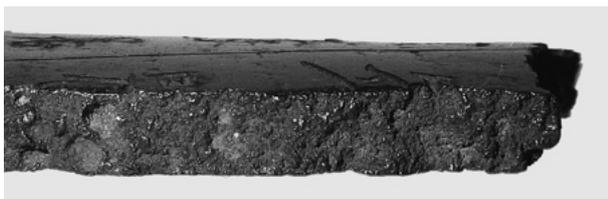
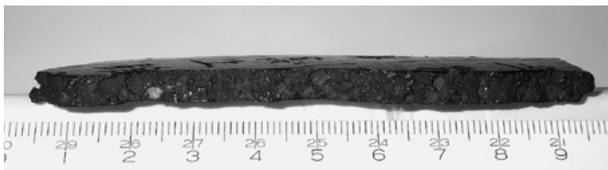
表1 行基墓誌断片の金属組成

測定位置	銅 (Cu)	錫 (Sn)	砒素 (As)	鉛 (Pb)	金 (Au)	鉄 (Fe)	その他 (微量含有)	特記事項
①表面・「特」の上	71.2	1.5	1.2	1.4	23.0	0.4	銀(Ag)、アンチモン(Sb)	表面に鍍金の痕跡
②表面・「上」の左	77.5	1.4	1.7	1.6	16.0	0.6	銀(Ag)、アンチモン(Sb)	表面に鍍金の痕跡
③裏面・右上	80.4	1.4	3.5	9.6	-	4.0	銀(Ag)、アンチモン(Sb)	
④裏面・左上	79.8	1.7	4.3	9.4	-	3.2	銀(Ag)、アンチモン(Sb)	
⑤右側面・「別」脇	88.4	1.6	4.3	4.3	-	0.6	銀(Ag)、アンチモン(Sb)	気泡部分を測定
⑥右側面・罫線下端	89.2	1.2	4.4	3.9	-	0.5	銀(Ag)、アンチモン(Sb)	
⑦右側面・「上」脇	88.8	1.4	4.1	4.5	-	0.4	銀(Ag)、アンチモン(Sb)	黄色の気泡部分を測定
⑧上断面・中央罫線	87.4	1.4	4.2	5.5	-	0.8	銀(Ag)、アンチモン(Sb)	
③~⑧(鍍金なし)の 平均値	85.6	1.5	4.1	6.2	-	1.6	銀(Ag)、アンチモン(Sb)	

装置 ハンドヘルド蛍光X線分析計：
SPECTRO製 xSORT Combi XHH03_C
条件 X線管球 Rh (ロジウム) ターゲット
X線出力 50kV, 50μA
測定時間 5秒
照射径 約1cm
検出器 SDD (シリコンドリフト検出器)
資料と装置の距離 約1cm



上面俯瞰と同破断面



右側面と同破断面拡大

写真2 行基墓誌断片の破断面

張りがあり、横断面はゆるいアーチ形を描いている。
素材は蛍光X線分析により、およそ銅八五・六%、錫一・五%、鉛六・二%、砒素四・一%を含む合金で、表面にのみ金が検出されている(表1)。鉛や砒素を多く含むのが目立った特徴である。また、周縁の破断面には多数の気泡が表れており、大きなものは直径5mmもある(写真2)。铸造の際、溶銅内に生じたガスを十分に排気できなかった結果とみられるが、これほど大きな気泡を沢山含んだ銅製品はあまり見たことがない。この状態が全体にわたって生じていたのであれば、気泡が表面に露出して大きな孔を生じた部分もあったと想像される。また、構造的に弱くなるので、重圧がかかれば簡単に破断してしまうであろう。铸造技術的には失敗作と評価されかねないものであるが、まさにその点にこそ、本品の性格を考えるヒント

トがあるのかもしれない。

銘文は、罫線が三本、字形の分かるもの十八文字(字画の一部が見えるものは四文字分)を数える。先掲の『大僧上舍利瓶記』全文に照らすと、墓誌残欠はその後半部分、行基が大僧正に抜擢され、八十歳で亡くなるまでの部分に相当する。

年別(授)

備特居其上雖(然)

一年二月二日(丁)

(終)於右京

※()は字画の一部が見える文字

文字の形はやや力みながらも跳ねやはらいを忠実に言う楷書で、横画の最後を軽く「へ」字形に曲げる癖がある。鑿の運びは深く滑らかで、一部に角を立てながら底を浚うような刻字があるもの(薬研彫のV字刻みほど強いものはない)、大方の字画の中は丸底形を呈している。文字の輪郭にめくれが生じている部分も見受けられる。

罫線は勢いよく刻まれている部分と慎重な引き直しの両方が見られる。右より一本目は途中で途切れながらも、そのままの勢いで続きを刻んでいる。逆に二本目は一度手をとめて、その横に重複させて刻み始めるが、ややずれていることに気づき、あらためて最初の続きから慎重に刻み直している。なお、古代の墓誌の罫線は針書のように細かい線を引くものが多く(威奈大村骨蔵器〔慶雲四年/七〇七〕、美努岡万墓誌〔天平二年/七三〇〕、石川年足墓誌〔天平宝字六年/七六二〕など)、本品のように太線を深く彫り込むのは珍しい(近いものに山代忌寸真作墓誌〔戊辰年/七二八〕がある)。そこに他の墓誌とは

異なる製作経緯や動機を読み取れるかもしれない。

また今回の観察により、文字と罫線のどちらの刻線の中にも鍍金の痕跡が見られないことが確認された。威奈大村骨蔵器(前出)や山代忌寸真作墓誌(前出)、小治田安万侶墓誌(神龜六年/七二九)、石川年足墓誌(前出)など鍍金のある墓誌はすべて刻銘内に鍍金が確認されている⁽¹⁴⁾。それはすなわち、銅板や骨蔵器の表面に先に銘文を刻み、最後の仕上げとして鍍金を施す墓誌の通例に反して、本品は鍍金済みの完成体に後から銘文を刻んだ可能性が高いということである⁽¹⁵⁾。この点については本品の評価に直結する問題なので、また後に取り上げることにはしたい。

3、東大寺二月堂本尊光背断片について

(1) 資料の来歴と概要

行基墓誌断片を考える上で、同時代の鑄銅製品との比較検討は欠かせない。以下、東大寺二月堂の本尊の光背断片を紹介し、行基墓誌断片と比較してみたい。

東大寺二月堂は、周知の通り毎年三月(旧暦二月)に行われる修二会(お水取)で有名な建物で、本尊の銅造十一面観音像は、創建当初から内陣中央の岩盤上に立ち続けているという(秘仏)。寛文七年(一六六七)の火災により二月堂が焼け、本尊も大きく損傷し、光背や頭光は高熱により細かな断片となつてしまった。その断片は二月堂から降ろされて法華堂前の校倉に長らく収蔵されていたが、明治三十三年(一九〇〇)頃に関野貞氏によって再発見された(濱田一八九九)。以後、残る断片をつないで板に鋸留めし、およそ当初の姿が偲べる状態に復元された。ここに紹介する光背断片は、この復元が

なされる前に寺外に流出した小片の一つで、仏教美術品の収集家であった野田吉兵衛氏の旧蔵品である（現在は当館蔵）。光背全体は近年、裏面観察もできるようにアクリル板に固定され直し、本品の原位置にはレプリカが嵌め込まれて復元・公開されている（当館寄託、なら仏像館に展示）。

ところで、二月堂の本尊および光背の製作年代であるが、『東大寺要録』には実忠和尚が天平勝宝四年（七五二）に十二面観音悔過を行ったとあり、これを二月堂の創建としているが、一方で天平勝宝八歳（七五六）の「東大寺山堺四至図」には二月堂の姿がなく、もう少し遅れるとの見方がある（奈良六大寺大観刊行会 一九六八）。福山敏男氏は、天平宝字六年（七六二）の「造東大寺司告朔解」に「錯作銅井像天衣并座花」などとあることから、およそこの頃に鑄造されたと推定されており（福山 一九四七）、またこの像の光背に線刻された仏菩薩の表現は、大仏連弁（天平勝宝末年〔七五五～六頃〕に鑄成）の線刻画よりも後出的で、やはり天平宝字年間（七五七～七六四）頃

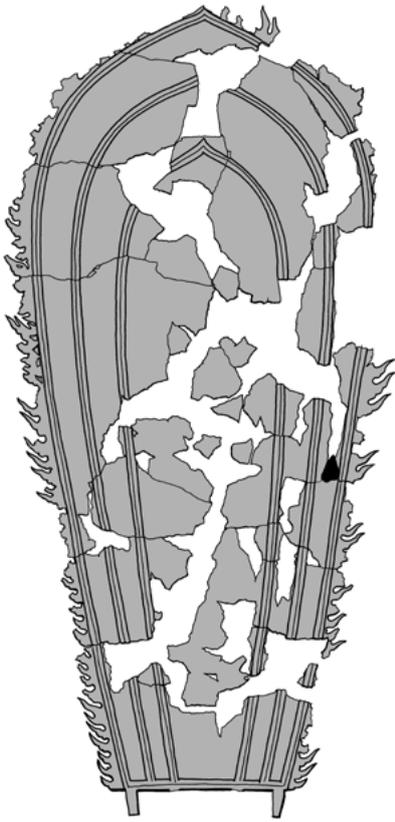


図2 東大寺二月堂本尊光背の現存部分
（黒い三角形が本断片）

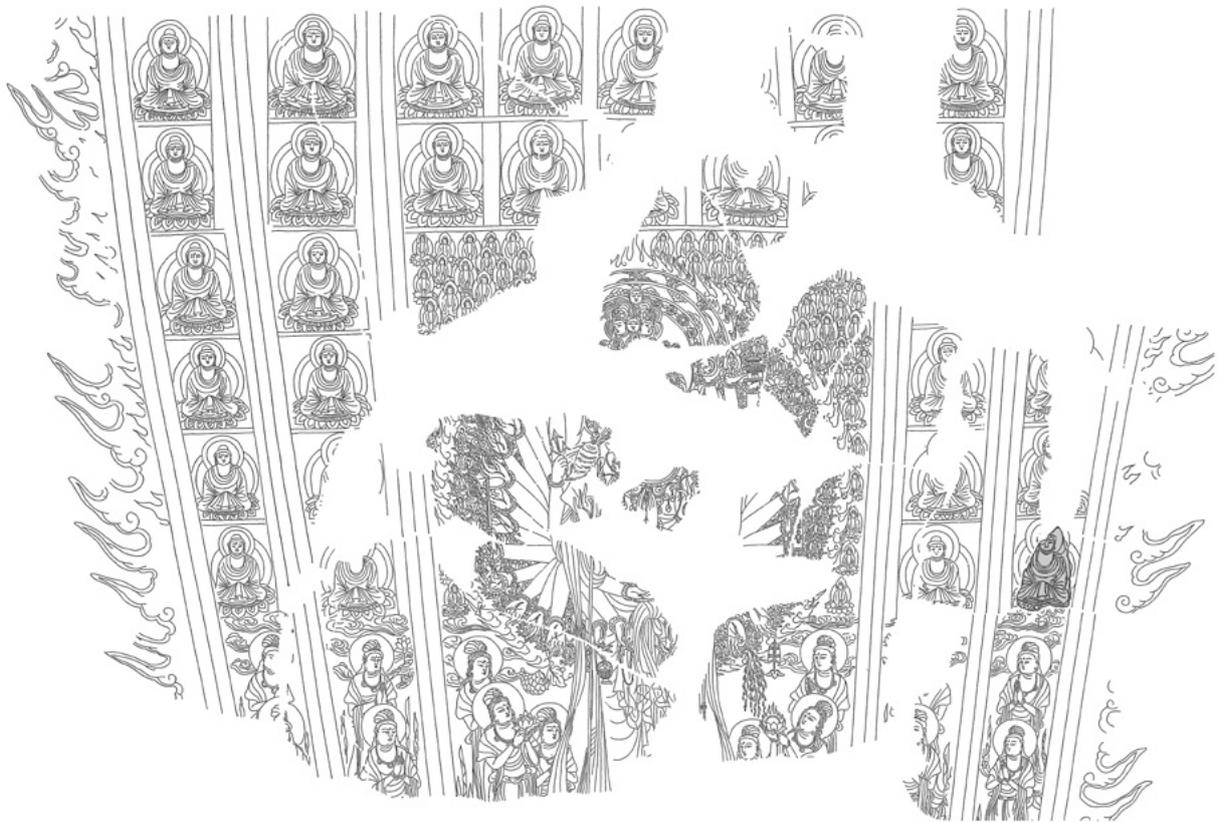


図3 東大寺二月堂本尊光背の線刻画〔表面・中段〕と本断片の位置〔アミかけ〕（鴛塚ほか 2003より改変・引用）

に相当すると指摘されている(奈良六大寺大観刊行会 同前)。行基墓誌の天平二十一年(七四九)よりも十数年遅れるが、よく似た厚手の鑄銅製品であり、比較資料としてこれ以上に相応しいものはないと思われる。

光背全体は総高二・二七m(柄含む)で、三重の帯圈を設け、その外縁に火焰が立ち上がる。これほどの大型品でありながら、本体の厚さは僅か三〜九mmで、一五〜一八mm厚の帯圈を巡らせるにしても、全体を一鑄で作っている技量は相当なものである。当初は表裏面に鍍金が施されていたようであるが、今はほとんど見えず、黒褐色を呈している。

その地板には仏菩薩の世界が精巧な線刻で表されている。その内容は大悲心陀羅尼の力で変化した十一面千手観音を中心に、そこに如来や菩薩、天部らが参集する様子を表わしている(稲本二〇〇四)。この光背図様の中で、本品は正面に向かって右側、最外枠の中段にあたり、如来坐像が縦に一人で並ぶ部分に相当する(図2、3)。

(2) 光背断片の詳細

平面形態は不整三角形、表面(如来像を描く側)に向かい僅かな反り歪みはあるが、おおむね平坦で、表裏面とも滑らかに整えられている(図4)。縦七・七cm(最大長)、横四・六cm(最大幅)、厚四・六mm、重量七五・八gである。表面には、蓮華座に坐し、膝前で合わせた両手を衣で隠す如来の姿を表し、裏面は上方にたなびく衣裂と、山岳の裾が連なる様子が部分的に見える。いずれも鑿による線刻文

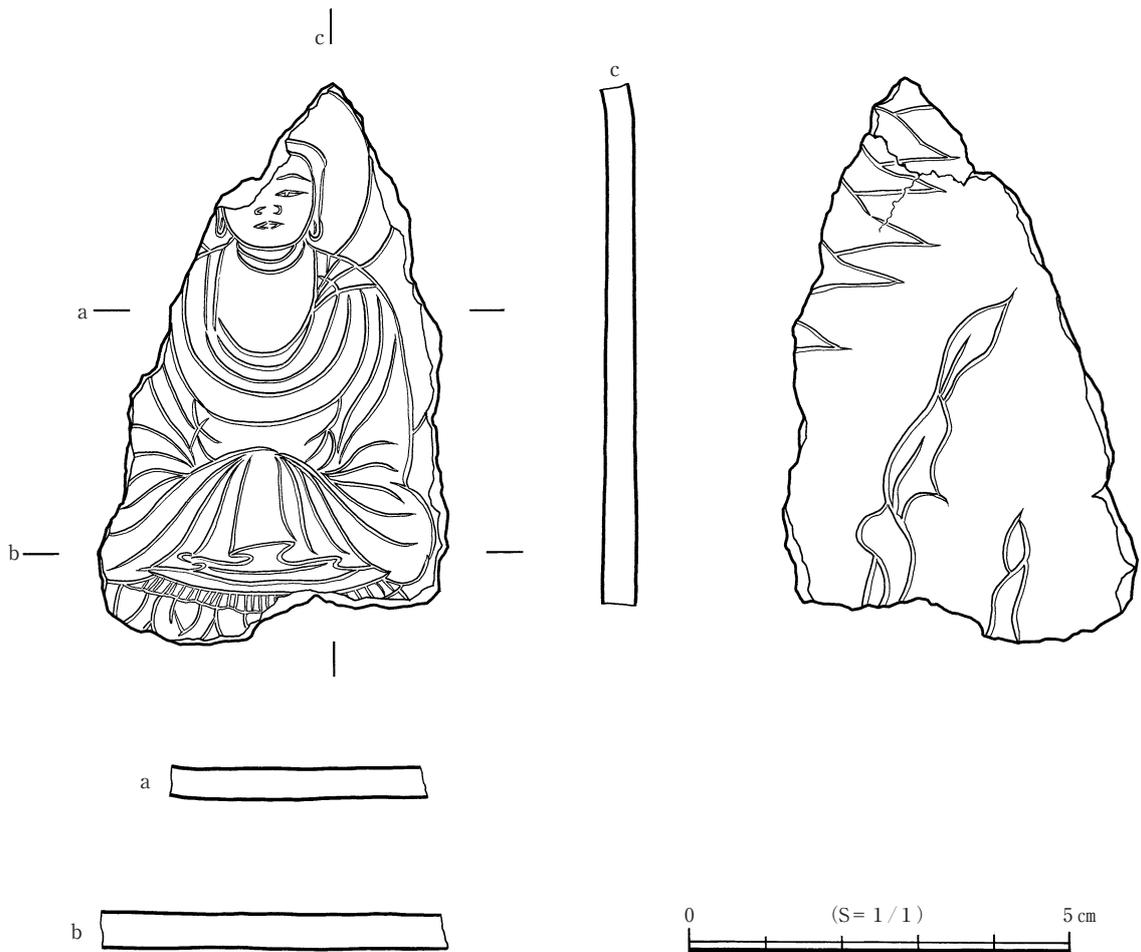
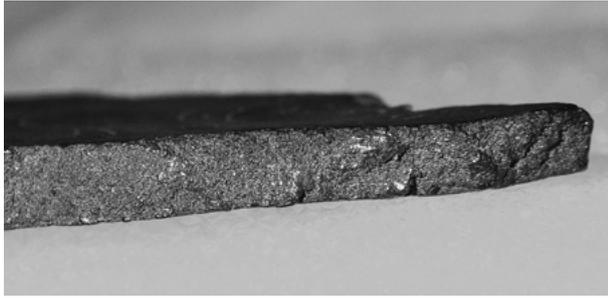


図4 東大寺二月堂本尊光背断片実測図



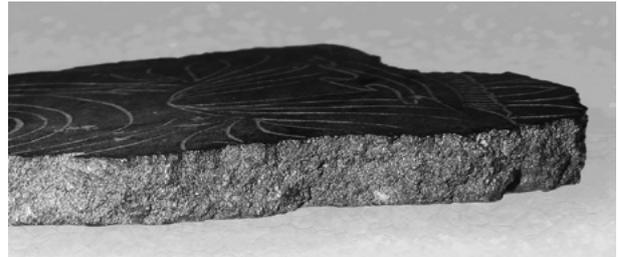
右側面の破断面



右側面俯瞰



下面の破断面



左側面の破断面

写真3 東大寺二月堂本尊光背断片の破断面

表2 東大寺二月堂本尊光背断片の金属組成

測定位置	元素(%) 銅 (Cu)	錫 (Sn)	砒素 (As)	鉛 (Pb)	金 (Au)	その他 (微量含有)	特記事項
①表面・如来顔	88.6	2.1	3.3	1.6	3.0	銀(Ag)、鉄(Fe)、アンチモン(Sd)	
②表面・如来腹	87.9	2.1	3.2	1.6	3.9	銀(Ag)、鉄(Fe)、アンチモン(Sd)	
③表面・裳裾	88.3	2.1	3.6	1.7	2.7	銀(Ag)、鉄(Fe)、アンチモン(Sd)	
④裏面・山裾付近	87.1	1.7	2.9	1.6	5.5	銀(Ag)、鉄(Fe)、アンチモン(Sd)	近代の朱書あり
⑤裏面・衣脇	86.2	2.0	2.8	1.2	6.5	銀(Ag)、鉄(Fe)、アンチモン(Sd)	近代の朱書あり
⑥右側面	92.6	1.7	3.3	1.2	-	銀(Ag)、鉄(Fe)、アンチモン(Sd)	
⑦左側面	92.4	1.9	3.6	1.1	-	銀(Ag)、鉄(Fe)、アンチモン(Sd)	
⑥・⑦(鍍金なし)の 平均値	92.5	1.8	3.5	1.2	-		

※装置、条件は表1と同じ

で、裏面のみ地に魚々子鑿が打たれている。およそ鑿運びは流暢で刻線も生き生きとしている。刻線の中は丸く底を浚うように削られており、行基墓誌の銘文に比べて浅く、全体に均一な力加減を感じる。周縁は被熱により自然破断した粗い割れ口を見せる。行基墓誌のような大きな気泡はもとより、小さな「巣」も一切みられず、均質な銅塊の切断面と言つてよい(写真3)。

蛍光X線による成分分析の結果は、銅九二・五%、錫一・八%、砒素三・五%、鉛一・二%であった(表2)。これは鍍金されていない断面部分を測定した平均値で、表と裏面からは上記の成分に加えて金が二・七〜六・五%検出されている。この結果から、錫や鉛を僅かに含む純度の高い銅製品であり、砒素を含む特徴から周防国長登産の銅が使われた可能性が想定される。

4、行基墓誌断片と東大寺

二月堂本尊光背断片の比較

以上に紹介した奈良時代の二つの銅片を比較してみたい。まず一見して分かる顕著な違いは、行基墓誌の断面に見える気泡が

表3 古代鋳銅作品の金属組成比較

測定対象	時代	銅 (Cu)	錫 (Sn)	砒素 (As)	鉛 (Pb)	他	特記事項
蟹満寺釈迦如来坐像	7C後～8C中	92.4	1.5	2.6	0.6	2.8	
薬師寺金堂月光菩薩蓮台	7C後	96.4	1.0	1.4	0.3	0.9	
薬師寺講堂薬師像	8C	94.6	0.4	1.9	0.5	2.7	
東大寺大仏左膝下部	8C中	92.8	1.8	3.0	0.5	2.0	
東大寺八角燈籠	8C中 (751年)	87.4	1.2	4.1	1.4	5.9	
行基墓誌残欠	8C中 (749年)	85.6	1.5	4.1	6.2	2.6	断面と裏面の平均値
東大寺二月堂本尊光背	8C中 (760年代)	92.5	1.8	3.5	1.2	1.0	断面の平均値

三船ほか 2011 を引用して作成

光背断片には皆無な点である。行基墓誌の気泡は、溶銅から生じたガスを逃がす孔を鋳型に設けなかったか、あるいは鋳型の熱管理が不十分で溶銅が急冷したためであろう。他にも原因が求められるかもしれないが、いずれにせよ現代の感覚では鋳物として欠陥品である。一方、光背の方ははるかに大きな品であるにもかかわらず、一点の「巢」もなく均質に仕上がっている。両者の鋳造技術の差は歴然としているようである。

次に鑿の刻線についてみると、行基墓誌は文字、光背は絵画なので厳密には比べようがないが、行基墓誌は力をこめて深く刻んでおり、罫線を途中で引き直しているように若干の個性を感じることができるといえる。鍍金を施した後から文字を刻んでいるのは、鋳造と彫金が別の場所で行われたからであろう。特異な製作背景を推測されるものであり、そ

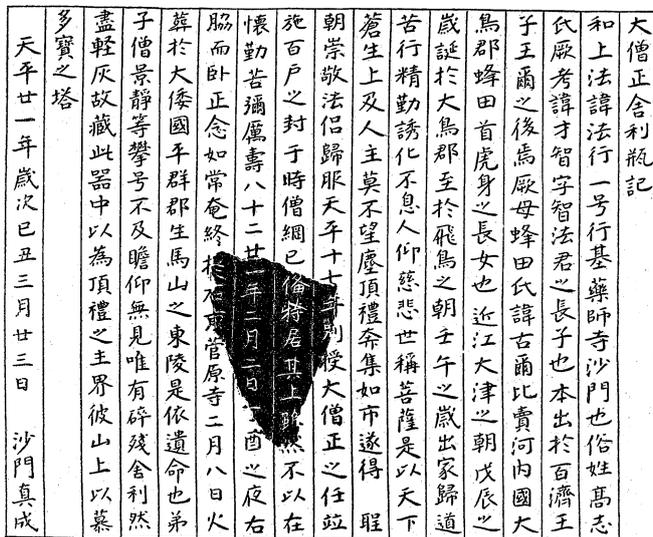


図5 行基墓誌銘の復元図 (藤澤 1956より引用)

の点からも造石山寺司や造東大寺司のような官営工房の仕事とは異なると感じられる。

成分分析に関しても違いは明瞭である。両者とも砒素を一定量含んでおり、長登銅山の銅を用いた可能性が指摘されるが、行基墓誌の方は鉛を平均六%近く含んでおり、それが一%前後の光背断片とは明らかに異なっている。鉛を混合することにより、銅の融点を下げ、湯流れをよくする効果が得られるので、効率的な鋳造に向いている。実際、中国・唐時代の銅鏡には約二五%の錫と共に約五%の鉛が含まれるのが通例である(成瀬二〇〇九)。ただし、鉛だけが卓越している点で、行基墓誌はやや特殊かもしれない。さらに七〜八世紀の鋳銅品の成分と比較してみると、光背断片は東大寺大仏や八角燈籠などと近い傾向にあることが分かる(表3)。一方、鉛の多い行基墓誌はその中でも異質な存在と確認されるであろう。

5、行基墓誌断片の復元的検討

本品は僅か一〇cmほどの小片であるが、ここに備わる情報をもとに、当初の姿を復元考察してみたい。まず、銘文の範囲についてであるが、藤澤一夫氏が復元した図5は、本品の罫線幅や字配りをもとに作成されており、最も現物に近いと思われる。復元された銘文枠は、本文十五行に表題と奥付を各一行加えて全十七行、一行あたり二十字詰めを原則とし、周縁を枠線で囲った横長の長方形となる。本品の一行幅は平均二・二cmなので、これを十七倍した三七・四cmが枠の横幅となる。縦幅は、図5の縦横比より二九・六cmとなる。面積は一一〇七cm²。現物の表面積四六・五cm²の二三・八倍の広さである。



写真4 行基舍利瓶推定の参考品
 (右) 行基遺身舍利瓶塔 (奈良・唐招提寺)
 (左) 忍性骨蔵器 [竹林寺忍性墓出土] (奈良・竹林寺)

ある。

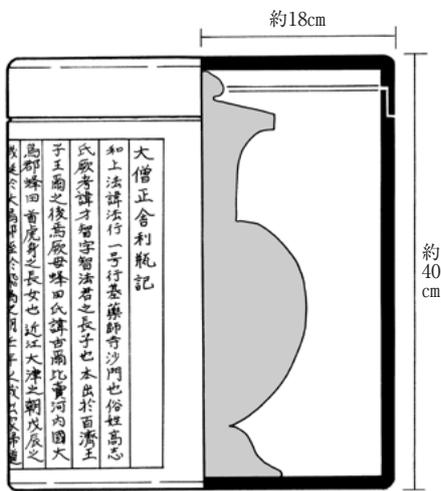


図6 銅製円筒形容器の推定復元図

次に外容器本体の復元であるが、『生駒山竹林寺縁起』の記述により、これが銅製の円筒形の容器であったことは確認されるが、具体的な大きさとするとほとんど分からない。まず、円筒の直径は、本品の横方向の湾曲から推定するしかないが、上段左に歪みが生じており、正確な湾曲比率がつかめない。梅原末治氏は「長さに對し約一分(約三mm…筆者注)内側に彎曲あり」と表現した(梅原一五一五b)が、それを参考に図1の横断面・上段(a)に補助線を加え、中段(b)と比較しながら回転復元すると、半径一八〜二〇cmの円形が得られる。容器の高さは、銘文枠が縦二九・六cmであったので、三〇cm以上であったことは確実である。行基の舍利瓶を模して後世に作られた行基遺身舍利瓶塔(写真4右)は、総高五六・五cmであるが、木製台と大袈裟な天蓋や相輪を除くと塔身は三五cm前後のようである。また、行基墓に做って自らの墓の設営を遺言したとみられる忍性の骨蔵器(写真4左)は高さ二九・七cmであった。これらを参考にするれば、高さ四〇cmくらいを目途にしておくことはできそうである。蓋については全く情報が無いが、シンプルな被蓋ないし印籠蓋を想像して、独自の高さを見込まずに先の約四〇cmを総高として



写真5 栗原寺三重塔伏鉢（奈良・談山神社）と銘文拡大

おく。以上により、半径約一八cm、高さ約四〇cm、安定感のある円筒形外容器が推定復元された（図6）。

ところで、本品は厚さが五mm以上あり、小断片でありながら一八六gもの重さがあった。上記の円筒形外容器の表面積の比率（本品の約一四一倍）をもとに、その重さを計算すると約二六・二kgとなる。中国・唐時代の斤（金銀器の重量から算出した当時の一斤は約六八〇g）に換算すれば、およそ三九斤に相当する。部位によつて厚さは一様でなかったと思われ、側壁よりも底板はさらに厚く、蓋と身が

重なる部分にも相応の厚みが見込まれる。よつて、これを上回る重量があったことは間違いないだろう。古代の骨蔵器や外容器でこれほど重いものは、石櫃（石製骨蔵器）を除けば存在しない。しかもこれは一重目の外容器の重さであり、外側にはこれを収納する二重目の銅製容器があり、さらにその外には八角の石製容器も存在したのである。その大きさや全重量は計り知れないが、もはや手で持ち運べる「容器」ではなく、墓所に据え置いた

「施設」の一部とみる方が妥当であろう。

これと関連して想起されるのは、鍍金を施した後に墓誌銘が刻まれていることである。銘文の後刻は金銅製骨蔵器では例がなく、むしろ建築材の設置銘に近いものを感じる。鍍金後に刻銘を行っている例として、栗原寺三重塔伏鉢（和銅八年〔七一五〕）が挙げられる（写真5）。伏鉢とは、塔の相輪基部に設置される半球形の部材であるが、この場合、栗原寺の四至や願主名、願文などが刻まれていた。露盤や伏鉢、相輪などは組み合わせを考えて鑄造されねばならず、設置よりもかなり前に製作されているはずである。一方、願文などの撰文は、建築部材の製作とは別の流れでゆっくり行われたのであろう。行基墓所の場合も、建築部材に匹敵する「銅筒」の製作が先行し、それとは別の場所で墓誌銘が撰文され、最後の墓所への設置前に刻銘が行われたと考えられる。大掛かりな墓所ゆえの分業体制が想像される。

以上より、行基の墓所は、骨蔵器を土坑に埋め置く一般的な火葬墓とは全く異なり、文字通り「舍利」を安置する仏塔特有の地下施設に擬したものだたと想定される。『大僧上舍利瓶記』の最後には「彼の山上を界し、以て多宝の塔に慕す」とあるが、それは舍利瓶を埋納した丘陵地の一面を塔に見立て、また慕うことにしたという意味であり、地上に多宝塔そのものを建立した、とまで深読みする必要はない。そもそも、奈良時代にはまだ墓の上に塔を建てる風習はなく、また行基が亡くなって約一月半の期間では塔建築を完成させるのは不可能である。もし地上施設があったとしたら、土壇に相輪状の標しるべを建てる程度の簡易なものであったと想像される。ともあ

れ、奈良時代の高僧の墓がほとんど知られていない中、行基の場合には墓の構造と造営理念がうかがえるきわめて貴重な事例といえよう。

6、行基墓誌残欠から考える行基集団

これまでの指摘をまとめると、行基墓誌断片は、①二六kg以上もある大型の金銅製円筒形容器であった、②その鑄造は大きな気泡をいくつも含む粗いものであった、③東大寺の大仏や八角燈籠、二月堂本尊光背などとは金属成分が異なり、官営工房とは別の場所での製作を思わせる、④銘文や罫線は力強くやや個性的で、鍍金を施した後から刻んでいた、⑤行基墓の地下構造は仏塔の舍利埋納施設に近いものであった、などである。いずれも断片的な情報であるが、これらから浮かび上がる行基墓所の造営者、ひいては行基集団とはどのようなものか、少し考えてみたい。

まず①の重厚な金銅製外容器に関して、銀製の舍利瓶を収めるためにこれを造り、さらに鍮付きの銅製外容器と八角形の石筒を用意して収納するという、⑤にまとめた実は大掛かりな造作がこの墓所の大きな特徴であった。こうした金・銀・銅・石という素材の異なる容器を重ねて奉籠するのは、『大般涅槃經』に説く釈迦の棺のあり様に因むものであり、また塔に仏舍利を奉納する形式として中国で発展してきたものであった。それに倣おうとしたのは、飛鳥・白鳳寺院で塔心礎に舍利を納めた経緯や記憶を聞き伝えられた僧侶、すなわち行基の弟子たちの発意とみて間違いないだろう。行基本人が自らの墓に贅を凝らすよう遺言するとは思えないので（行基は生駒山東麓で火葬するよう遺言した）、このような大掛かりな地下施設とな

ったのは、「弟子三千一百九人」（『東大寺要録』）とも記される大勢の崇敬者の想いを汲み、また今後の頂礼対象に相応しいものを残すべく、弟子たちが考え抜いた結果なのであろう。前例のない墓所造営計画に苦慮したと想像されるが、一方、八世紀前半は持統、文武、元正、元明の歴代天皇が火葬で葬られており、前代の古墳とは異なる埋葬施設を備えた山陵が設計、造営されていたはずである。山陵造営に伝統的に関わってきた土師氏のような集団であれば、そうした施設を参考に行基墓所の計画や造営を援助することは可能であったと思われる。行基が最後を迎えた菅原寺は大和の土師氏の本拠に建つ寺であり、また行基の十弟子の一人である法儀は土師氏の出身であった（後述）。こうした状況から考えて、行基の墓所造営、そして舍利瓶や外容器の設計は、弟子たちを中核としながら土師氏のような特定氏族の支援によって進められたと考えるのが妥当であろう。

では、その弟子たちとはどのような面々であったのか。『大僧正師徒各位注録』（『大僧正記』）とも。唐招提寺蔵によれば、行基の弟子は「十弟子僧」「翼従弟子千有余人」「侍者千有余人」「親族ノ弟子百有余人」の四種に分かれ、主だった弟子三十四名の名が挙げられている（日下一九一七）。「十弟子僧」とは釈迦の十大弟子に倣って選ばれた指導的立場の弟子たちとみられ、景静（弓削氏）を筆頭に、玄基（尾張氏）、法義（土師氏）、行林（犬貝氏）、神忠（高志氏）、延豊（秦氏）、慈深（辛国氏）、平則（坐氏）、首勇（河原氏）、崇道（大唐蘇氏）が並ぶ（以上、括弧内は出身氏族名）。中でも景静は『大僧上舍利瓶記』の中で行基の死を嘆き悲しむ僧の代表として名が挙げられており、行基一番の愛弟子であったと想像され、東大寺大仏開眼会では聖武天皇の勅命により都講を務めている（『東大寺要録』天平勝宝四年

〔七五二〕三月廿一日勅書。景静は、高齢の行基に代わって、大仏造立のための衆庶勸進を率先して行い、その功績により都講に招請されたとも言われている（石村一九七三）。また法義と崇道は、天平勝宝六年（七五四）、来朝した鑑真を難波駅で迎接しよう勅命を受けた僧侶であり（『東大寺要録』巻第四「大和尚伝」）、その法義と首勇は共に宝龜三年（七七二）に勅命にて十禪師に選任されている。さらに玄基は天平勝宝五年（七五三）に大安寺仁王会で講師を務め（『大安寺三綱牒』四月七日）、延豊は山階寺の「寺主」であった（『山階寺三綱牒』天平宝字二年〔七五八〕、『大日本古文書』第四）。このように行基の弟子たちには公務に携わり、また官寺で活躍するものが少なくなかった。

この「十弟子僧」に続く「翼従弟子」は、行基の教導に従う僧侶の集団とみられる。その代表の一人に光信の名が見えるが、彼は行基の臨終間際において、行基建立の諸院を維持するよう遺言された弟子であり（『行基年譜』）、宝龜三年（七七二）には先掲の法義や首勇らと並んで勅命で十禪師に選ばれている。そして『大僧正師徒各位注録』が最後に掲げる「親族弟子」は、行基と縁戚関係にある弟子とみられ、代表者に「元興寺僧真成大村氏、薬師寺僧浄安高志氏」らが挙がっている。筆頭の真成は『大僧上舍利瓶記』の撰文者の「沙門真成」と同一人物である。文章力もさることながら、縁戚ゆえに、行基の出自や過去の事績に関わる情報の取りまとめに利があり、撰文を任されたのであろう。ちなみに、『大僧上舍利瓶記』の終盤で「弟子僧景静等は攀号するも及ばず、瞻仰すれども見るもの無く、唯だ碎け残れる舍利有るのみなり」と記しているが、これは景静を筆頭とする十弟子僧の嘆きの様を実見し、自らも悲しみを抱く「身

内」ならではの表現とも受け取れる。この銘文を鍍金の後に刻むことになった（上記④）のは、公的記録を編纂して卒伝を作る計画性や冷静さとは反対の状況にありながら、自制を保ち修正を繰り返し、多くの時間を費やしてしまったからではないだろうか。

さて、本節の冒頭に掲げた、②墓誌断片には気泡が多く、③金属成分が東大寺の銅製品とは異なり、官営工房の作とはみられないこと、などから、行基の舍利瓶を収める容器は、行基集団の周辺で金工技術に長けた者を抱える氏族の援助により作られたとみるのが妥当であろう。例えば土師氏や秦氏、高志氏など行基に関係が深く、特定の技術伝統をもつ渡来系氏族が有力候補となる。本貫氏族の例として、やや古い事例ではあるが、銀製墓誌で知られる僧道葉（和銅七年〔七一四〕没）は、「大楯君素止奈の孫」と銘記されるように、現在の奈良県天理市樺本町周辺（現在も楯神社がある）に住んだ帰化系氏族の出身である（堀池一九六二）。没後に本貫近くに帰葬されたのであり、墓誌をあえて銀で作ったのは氏族の豊かな財力を反映したものである。行基の場合、和泉や河内での活動を考えると、出自である高志氏や蜂田氏の支援を得た可能性は少なくないが、さらに蓋然性では土師氏の関与がより高いように思われる。先述したように、行基が最後を迎えた菅原寺は大和の土師氏の本拠地であり、葬送と関わる点でも土師氏の職能や知識は頼るに相応しい¹⁸。また行基による知識結集のシンボルとも言える大野土塔（大阪府堺市）では、発掘調査によって約一二〇〇点の文字瓦が発見され、非常に多くの人々が瓦を寄進し結縁していた様子が明らかになった。中でも「矢田部連」や「蓮光」などの人名瓦は数多く見出され、大檀越であったと推定されているが、それと並んで地元の土師氏（土塔は古代の大鳥郡

土師郷に造られた)の刻銘も多く、大きな貢献を果たしたと考えられている(近藤二〇一四)。行基の出生地も大鳥郡でありその縁も深いと思われるが、さらに巨大古墳の多い当地周辺で土師氏が蓄えた土木技術に期するところが大きかったであろう。

銅素材の調達や彫金技術については、寺院造営の技術の延長上で対応が可能と考えられる。行基が天平三年(七三一)に建立したとされる山崎院(京都府乙訓郡大山崎町)の発掘調査では、同院南限にあたる山陽道の側溝から六枚の銅インゴットが発見された(林二〇一一)。このインゴットが発見された土層は九世紀第一四半期の遺物を含むので、それを下限として、行基の時代まで遡るか確証はないが、ゆかりの寺院に銅素材が蓄えられていたことは大いに注目される。行基集団に関わる人々が、銅素材を流通させ、あるいは自前で製造を行っていた可能性が想定され、行基の墓所もその延長上で造営されたと考えることができそうである。

以上、行基墓誌断片から、その製作を担った集団について簡易な想像を加えてみた。この流れのままに集約すれば、行基墓所の大掛かりな造作や舍利瓶などはすべて行基を取り巻く弟子や氏族によって製作されたと言えそうである。しかしながら、そうシンプルに片付けて良いか迷う部分もある。最後にあえてその点について触れておきたい。

行基の卒伝には「豊櫻彦天皇(聖武)甚だ敬重したまふ。詔して、大僧正の位を授け、四百人の出家を施す」とある(『続日本紀』天平勝宝元年二月丁酉条)。また『行基年譜』には天平十三年(七四二)に聖武天皇が山城の泉橋院に行幸し、行基と終日語り合ったとも伝える。この泉橋寺での語らいは史実に異なるかもしれないが、聖武天皇が

行基を篤く崇敬していたことを象徴する話である。その天皇が行基の死に際して何もしなかったとは考え難いのではないか。記録には残らないものの、相応の弔物・贈物を送っていたことは想定されてしかるべきであろう。

天平十七年(七四五)の大僧正への抜擢は、東大寺大仏造営に貢献した行賞と見る向きもあるが、ひとえに天皇の崇敬による特例に他ならない。大僧正とはこれまでに存在しなかった地位で、仏教界を教導、統括する僧綱(基本定員は僧正一名、大僧都一名、小僧都二名、律師三名の計七名)の最上位に設けられたものである。ちなみに行基が大僧正に勅任された時、僧綱の最高位は玄昉であったが、十ヶ月後に筑紫観世音寺の別当に左遷されている。行基は没するまでこの大僧正の位にあつたので、平時は僧綱として正五位相当ないしそれ以上の贈物を得ており(中井一九八〇)、亡くなった際にも相応の品が贈られているはずである。行基への贈物の記録はないが、神亀五年(七二八)に亡くなった義淵僧正の場合、「遣治部官人、監護喪事、又詔贈純一百疋、糸二百絢、綿三百屯、布二百端」とあり(神亀五年十月壬午条)、治部省の官人を喪事の監護に当たらせ、純ほか大量の品を贈っている。この贈物は一位を超える処遇であり、義淵の場合の特例であつたというが(中井前掲)、行基であればさらに上回る待遇であつたと予想される。これらが行基墓所の造営、ことに舍利瓶や外容器に用いられた銀や銅素材、鍍金のための砂金などを購うために活用されたとは考えられないだろうか。

さらに穿って考えるならば、水瓶形であつたという銀の舍利瓶は、その製作に高度な金工技術が必要であり、墓誌断片にみた「菓」の多い鑄銅製品を作る工人には難しいと推測される。正倉院宝物ある

いは法隆寺献納宝物（東京国立博物館蔵）として現在に遺る金属製の水瓶をみると、ほぼすべてが銅製（佐波理）で、いずれも本体を铸造後に轆轤挽きで器壁を極めて薄く削って仕上げている（加島二〇一など）。高台や頸部を後から接合する場合でも、薄手の部材を精巧に継いでおり、簡単に模倣できるものではない。貴重な銀素材を用い、難易度の高い水瓶形の容器を作るには、かなりの経験が必要であることは疑いない。さらに技巧的頂点にある唐からの将来品や、諸工人の作例を間近に見て模倣できる環境こそ、優品を生み出すに最も有利な場である。これらを考えると、銀製の舍利瓶は造東大寺司のような官営工房でなければ製作できなかったのではないかとさえ思われる。現物が失われてしまっている以上、これらはいくまで推測でしかない。しかし、民衆の菩薩である一方、「官僧」でもあった行基の死に際して、天皇をはじめ公的な対応がなかったとは考え難く、むしろその支援を受けながら行基集団の実動があったと考えておくのが素直なように思える。

おわりに

本稿は行基墓誌断片の詳細を紹介することを主眼にしていたが、二月堂本尊光背断片の調査が叶い、これを比較資料とすることで話の裾が広がった次第である。冗長の程はお許し頂ければ幸いである。当初の予想では、行基墓誌断片の金属組成は東大寺大仏に近いものになると考えていた。行基は天平二十一年（七四九）に亡くなるが、ちょうどこの頃に大仏の铸造はほぼ終了している（開眼会は三年後）。いわば、仏教界の巨人の死と盧舎那仏の誕生が期を一にしているの

である。聖武天皇が帰依した行基のため、日本で最も多く銅が集積されている東大寺より、その一滴を割いて墓所に捧げた。それは美談であり、大いにあり得そうな話と思えたのである。しかし結果は反対であり、官営工房の作ではなく、行基集団やそれを支える氏族による製作の可能性を考えねばならなくなった。

もとより限られた情報の中で、推測を重ねる以外に全体像を見通す術はなかったが、最終的に行基の墓所造営は、様々な人々の関与により成立したと見ておくのが良いと思われた。行基の活動はとかく民衆の利益と国家の要望の二極対立的に説明されることが少なくない。しかし、行基の弟子たちは官寺に籍をもち、勅命を受けて公事にあたることも多く、その活動に民・官の単純な塗り分けは難しいのが実状であろう。大仏造立への協力が、民の一握りの土でも許されたように、行基の墓所造営も官民間わなない「知識」の結集があったのかもしれない。全般にわたり大方のご批評を頂けたら幸いである。

なお、本稿掲載の写真は、部分拡大を除き当館の佐々木香輔氏によるものである。蛍光X線分析は当館の鳥越俊行氏に対応頂いた。また、本稿の執筆にあたっては、筑波大学名誉教授根本誠二先生より多大なるご教示・ご支援を頂いた。末筆ながら記して感謝申し上げます。次第である。

（よしざわ さとる／奈良国立博物館学芸部列品室長）

(1) 先行研究としては、水木要太郎氏の報告(水木一九一四)をはじめ、梅原末治氏の考察(梅原一九一五a・b)、『天平地寶』における紹介(石田ほか一九三七)などが早い段階のものである。古代の墓誌の一つとして最も詳しい報告は『古代の墓誌』(奈良国立文化財研究所飛鳥資料館一九七七)であり、墓所も含めて考古学的に紹介したものに大脇氏の論稿がある(大脇二〇〇二)。他にも行基墓誌に触れた展覧会図録や概説書は非常に多い。

なお、本品の名称は「行基墓誌残欠」(『奈良国立博物館の名宝』一九九七)の他、「墓誌断片(奈良県行基墓出土)」「(当館HP・収蔵品データベース、文化財オンライン解説等)」「銅製行基舍利瓶残片」(重要美術品登録名称)、「行基骨蔵器断片」(『古代の墓誌』一九七七)など様々に呼ばれている。行基墓誌の破片は本品が唯一の品なので、いずれの名称でも混乱はないが、本稿では「行基墓誌断片」を用いることにした。ちなみに、「墓誌断片(行基墓出土)」というのは厳密には正しくない。現在の竹林寺境内の行基墓から鎌倉時代に発掘されたのは完全な形の骨蔵器と外容器(墓誌銘を刻む)で、戦国時代の火災により現在の「墓誌断片」となり、それがどのような経緯か分からぬが、興山往生院の本堂裏の五輪塔(こちらも行基墓と称される)の下から掘り出されたと地元では伝承されている(瀬尾一九九二)。「断片」が「行基墓」から出土したという点にあまりいさを含んでいない。また「銅製行基舍利瓶残片」も、本品は行基舍利瓶ではなくその外容器の断片なので適切ではない。「行基墓誌残欠」は当館の展示等において最も多用してきた名称であるが、本稿で併せて紹介する「二月堂本尊光背断片」と統一をはかるために「残欠」でなく「断片」とした。

(2) 行基墓所の位置については竹林寺境内とするものと、その南方の興山往生院付近とするものがあり、特に後者は江戸時代に表された『生駒山竹林寺縁起』の伝承を根拠とするもので歴史的信憑性は低い(瀬尾一九九二)。竹林寺境内における墓所の位置については狭川真一氏の考察が参考になる(狭川二〇〇九)。

(3) 『大日本仏教全書』所収。また『行基事典』の釈文も参照した。なお、ほぼ同内容の別本が『大和國生馬山有里村行基菩薩御遺骨出現之事』と題して『續群書類従』第八輯下に収められている。

(4) 僧寂滅についての詳細は不明であるが、行基墓所発掘の経緯を唐招提

寺に注進しているもので、同寺の僧侶もしくは末寺に籍のあった僧侶と推定されている(井上(編)一九九七)。凝然の遺した『竹林寺略録』には、寂滅は「竹林寺の創興に功あり」と記しており、この発掘を機に行基をまつる塔や堂宇を建てて竹林寺を創建した僧侶とみられる。

(5) 慶恩に下された行基の託宣の一つに、墓の上に建つ石塔の二層目に舍利を出現させるというのがあった。しかし、その石塔は近年に建てたものなので、そこに舍利が出現したことを人々はさらに怪しんだという。「近年」、すなわち鎌倉時代に石塔が建てられたのは、そこに大がかりな建築がなかったからである。『大僧上舍利瓶記』にいう「多寶之塔」は、墓が営まれた丘陵地を塔に見たてたものと思われ、簡易な施設はあってもすでに消滅していたのかもしれない。ただし、そこが行基の墓所と分かるような伝承なり標識的なものが鎌倉時代まで残っていたからこそ石塔が建てられたとも考えられる。

(6) 例えば、九世紀の『日本霊異記』中巻第七では、行基のことを妬んだ智光が冥界に行き、行基菩薩が転生して住むことになる金の楼閣を目撃する話がある。

(7) 『百練抄』嘉禎二年六月廿四日条。中山観音堂(現在の京都市左京区吉田にかつて存在した寺。千手観音を本尊とした)の周辺で、細瓶に安置した行基菩薩の遺骨と称するものが開帳されたが、参詣の輩はその遺骨(粉の如きものだったという)を自由に取っ出していたと記されている。この書きぶりでは、本物の行基の遺骨なのか疑わしいが、行基の舍利出現のニュースが都でも広まっていたことが知られる。

(8) 『東大寺續要録』供養編本「行基舍利供養事」。「大佛殿行基菩薩骨舍利供養事弘長元年」「同 弘長三年」。なお、唐招提寺には「大聖竹林寺」の針書銘をもつ鎌倉時代の小型舍利容器が伝わっており(写真6)、中に行基菩薩三生(天竺や日本に転生した三生涯)の舍利を納めている。正嘉三年に東大寺で行われた行基舍利供養はこの舍利であったとの見方がある(奈良六六寺大観刊行会一九六九)。しかし、まだこの頃は本物の行基舍利も存在していたので、擬似的な舍利を供養に用いるまでもなかったかと思料する。一方、江戸時代の延享四年(一七四七)は行基菩薩一千年忌、弘化四年(一八四七)は一千百年忌にあたり、同じく東大寺で行基舍利供養が盛大に行われている(中尾一九九〇)。この頃には行基舍利瓶は失われているので(十五世紀末の合戦で竹林寺は炎上、行基舍利瓶も灰塵に帰したとみられる)、先の行基

「三世舍利」が使われたのかもしれない。



写真6 行基菩薩三世の舍利を納めた金銅舍利容器（奈良・唐招提寺）

- (9) 『竹林寺略録』は『大日本仏教全書』（鈴木学術財団一九七二）や、『竹林寺の歴史』（中尾一九九〇）、『生駒市誌』（生駒市誌編纂委員会一九七二）などに所収。
- (10) 『大乘院寺社雑事記』明応七年八月六日条。この合戦による火災で行基舍利瓶や外容器が失われたとみる意見は多い（例えば、清水二〇一五）。
- (11) 『大僧上舍利瓶記』は、水木一九一四、梅原一九一五a・b、石田ほか一九三七、井上一九五九、奈良国立文化財研究所飛鳥資料館一九七七、井上（編）一九九七などに全文が発表されている。吉田靖雄氏によれば、『大僧上舍利瓶記』は唐招提寺に伝わるもの他に宮内庁図書寮所蔵の『池底叢書』三二巻に含まれるものがあり、後者は一行二十字詰で書かれており墓誌の字配りを忠実に写したものであるという（吉田一九八七）。なお、「大僧上」は「大僧正」が正しいが、唐招提寺本（写真1）の表題に合わせて、本稿では『大僧上舍利瓶記』と表記している。
- (12) 『大僧上舍利瓶記』が原則として一行二十字詰であったことは疑いない。ただし、墓誌断片の三行目の「一年二月二日丁」は漢数字が多いため詰めて刻字しており、二行目の六文字と同じ縦幅内に七文字を入れている。藤澤一夫氏は、この行を二十一文字詰めにして本品の拓本

を上手く嵌め込んだ図を作成している（藤澤一九五六）。これが最も現物に近い復元と見なされ、本稿の図5に引用した。

- (13) 本品は不整の逆三角形で、向かって左の角がやや高い。本品を中軸線にそって立たせた時、左角から最下端までの高さが「最大高」一〇・七cmである。現物の実寸としての「最大長」は、中央の罫線のあたりで九・七cmとなる。

- (14) 墓誌の刻銘内に鍍金があることは『古代の墓誌』（奈良国立文化財研究所飛鳥資料館一九七七）で指摘されている。ただし、行基墓誌断片に關しては、刻銘内の鍍金に関する記載がない。

- (15) 金銅製品が被熱すると黒褐色化して肉眼では鍍金の存在を確認するのが難しくなる。本稿で紹介した二月堂本尊光背断片は、肉眼では全く金色を確認することができないが、蛍光X線分析では表裏面に強い金の反応がある。行基墓誌断片も同様に、表面の鍍金の痕跡は肉眼では確認が難しい。銘文の中はすべて黒褐色で、鍍金の痕跡は全く見られない。これを確認するため、今回は折り畳んだアルミホイルに幅約1mmのスリットを切り開け、それを銘文上に置き、刻銘と罫線の中のみ蛍光X線が照射されるような検査を行った。結果、文字のない表面では金が検出される一方、刻銘の中ではどの文字の中でも金を検出することはなかった。ただし、これはハンディな蛍光X線分析機による簡易な測定なので、また別の機会により精度を上げた分析を行う必要はあろう。

- (16) 忍性は鎌倉時代後期の僧侶で、貧民や病人など弱者救済や架橋、港湾整備などの利他的な社会事業を推進した。文暦二年（一二三五）の行基墓発掘の際に忍性は二六歳で、おそらく行基墓や舍利瓶の現物を見ていると思われる。彼の伝記『性公大徳譜』には毎月生駒に詣でること六年、とある。生涯をかけた社会事業も行基の事跡に倣ったものである。竹林寺の忍性墓は、八角形の石櫃の中に銅製の水瓶形骨蔵器を納めたものであった。金銅、銅製の外容器こそ省略しているものの、行基墓の構造や形状と似ていることが注目される（大脇二〇〇二、吉澤二〇一六など）。なお、忍性墓が営まれた時代には、行基の舍利瓶はまだ現存していたはずであり、その面影を多少なりとも反映していた可能性がある。

- (17) 土師氏が墳墓の築造や埴輪や土器類の製作、喪葬に関わる諸般の準備に関わったことは広く知られている。その伝統より、諸陵寮の頭や助

に土師宿禰が歴代任命されてきており(奈良時代では宝亀二年(七七
一)七月の土師宿禰和麻呂の助任命が最後)、慶雲四年(七〇七)には
造山陵司にも任命されている(直木一九六〇)。

- (18) 菅原の地は、天応元年(七八一)に改氏姓を願ひ出て、その居住地で
ある地名から菅原姓を賜った土師氏の本貫地である。大和の土師氏は
他に秋篠もあるが、どちらも近接した地域である。菅原寺の東方、菅
原東遺跡では埴輪窯や古墳時代の集落跡が発見されており、佐紀・盾
列古墳群に関わるものと推測されている。また、菅原寺に隣接する十
一坪の出土品には「竹状模骨丸瓦」と呼ぶ特殊な作りの瓦があり、そ
れは飛鳥寺の東南禅院や、「土寺」の墨書から土師氏の寺とされる姫寺
廢寺(左京八状三坊十五坪)からも発見されており、共に土師氏との
関連が想定されている(大西二〇〇三)。さらに、近隣に残る宝来山
古墳は垂仁天皇陵に治定されているが、『日本書紀』ではこの垂仁陵に
おいて、土師氏の始祖の野見宿禰が埴輪を作り殉葬者に替えた話を載
せている。菅原は、まさに土師氏の本貫に相応しい土地である。
- (19) 行基の卒伝に「薬師寺の僧」と記されるのは、僧綱が薬師寺に置かれ
ていたためであり、最後まで大僧正の位にあったからである。

参考・引用文献

- 生駒市誌編纂委員会 一九七一『生駒市誌資料編Ⅰ』生駒市役所
石田茂作ほか 一九三七『天平地寶』帝室博物館
石村喜英 一九七三「行基の弟子列伝と一・二の問題」『榎田博士頌寿記念
高僧伝の研究』山喜房仏所林
稲本泰生 二〇〇四「東大寺二月堂本尊光背圖像考―大仏連弁線刻図を参照
して―」『鹿園雑集』第六号 奈良国立博物館
井上薫 一九五九『人物叢書行基』吉川弘文館
井上薫(編) 一九九七『行基事典』国書刊行会
梅原末治 一九一五 a 「近畿の遺物と遺蹟」『歴史と地理』第二十五卷第六号
日本歴史地理学会
梅原末治 一九一五 b 「行基舍利瓶記に見えたる其姓氏と享年に就て」
『考古学雑誌』第五卷第十二号 考古学会
大西貴夫 二〇〇三「菅原寺及び周辺出土の瓦からみたその造営背景」『檀原
考古学研究論集』第十四 八木書店

大脇潔 二〇〇二「行基の墓と墓誌」『行基の考古学』塙書房

加島勝 二〇一一『日本の美術 第五四〇号 柄香炉と水瓶』ぎょうせい

日下無倫 一九一七「行基菩薩門弟雑考」(1)(2)『無尽燈』二二卷九・一

〇号(論集奈良仏教第三卷 奈良時代の僧侶と社会)一九九四 雄山閣に
所収)

近藤康司 二〇一四『行基と知識集団の考古学』清文堂

狭川真一 二〇〇九「大和の墓制Ⅱ 生駒谷の葬地と石造物」『近畿文化』七一

三号 近畿文化会事務局

佐久間竜 一九五六「官僧について」『続日本紀研究』第三卷第三・四号

(『日本古代僧伝の研究』一九八三 吉川弘文館に所収)

清水昭博 二〇一五「行基墓―鎌倉時代の発掘―」『シンポジウム報告書最新
研究 行基の考古学』帝塚山大学考古学研究所・附属博物館

鈴木学術財団 一九七二『大日本仏教全書 第八十五卷 寺誌部三』

瀬尾満 一九九二「奈良県生駒市有里の行基墓伝説―二つの行基墓―」『二松
学舎大学論集』第三十五号 二松学舎大学

直木孝次郎 一九六〇「土師氏の研究」『人文研究』一一卷九号 大阪市立大学

文学部(『日本古代の氏族と天皇』一九六四 塙書房に所収)

中井真孝 一九八〇「奈良時代の僧綱」『日本古代の国家と宗教』上巻 吉川弘
文館

中尾良蔵 一九九〇『竹林寺の歴史』

奈良国立博物館 一九九七『奈良国立博物館の名宝―一世紀の軌跡―』

奈良国立文化財研究所飛鳥資料館 一九七七『日本古代の墓誌』(一九七九年
に太安萬侶墓誌を加えた改訂版を同朋舎より発行)

奈良六大大寺大観刊行会 一九六八『奈良六大大寺大観 第十卷 東大寺二 岩波書
店

奈良六大大寺大観刊行会 一九六九『奈良六大大寺大観 第十二卷 唐招提寺一』岩
波書店

成瀬正和 二〇〇九『日本の美術 第五二二号 正倉院の宝飾鏡』ぎょうせい

根本誠二 一九九八『奈良時代の僧侶と社会』雄山閣

濱田青陵 一八八九「東大寺二月堂本尊光背の毛彫」『國華』第十七編第二百
二号 國華社

林亨 二〇一一「山崎国府跡第20次発掘調査と銅地金の出土について」『大山
崎町文化情報』二〇〇九 大山崎町教育委員会

福山敏男 一九四七『奈良朝の東大寺』高桐書院

- 藤澤一夫 一九五六「墳墓と墓誌」『日本考古学講座第六卷歴史時代(古代)』
河出書房
- 堀池春峰 一九六一「佐井寺僧道葉墓誌に就いて」『日本歴史』一五三号
- 水木要太郎 一九一四「行基菩薩の墓」『奈良縣史蹟勝地調査會報告書』第二
回 奈良県
- 三船温尚・奥健夫(編) 二〇一一『国宝・蟹満寺釈迦如来坐像―古代大型金
銅仏を読み解く―』八木書店
- 吉田靖雄 一九八七「行基の弟子について」『行基と律令国家』吉川弘文館
- 吉澤悟 二〇一六「総論・生誕800年記念特別展『忍性―救済に捧げた生涯
―』概観」『忍性―救済に捧げた生涯―』奈良国立博物館
- 鷲塚泰光ほか 二〇〇三『日本上代における仏像の荘嚴』奈良国立博物館

A CONSIDERATION OF THE FRAGMENT OF THE BRONZE EPITAPH OF GYŌKI AS COMPARED WITH THOSE OF THE MANDORLA OF THE PRINCIPAL ICON OF THE NIGATSUDŌ HALL AT TŌDAI-JI TEMPLE

YOSHIZAWA SATORU

Gyōki (668–749) was a Buddhist monk who lived during the Nara period. He spread Buddhism among the populace, and having led social welfare projects working to aid the poor and building bridges and reservoirs, he was lauded as a bodhisattva (Jpn. *bosatsu*). The Nara National Museum possesses a fragment from the epitaph of Gyōki (color photo 1). It is called an epitaph (*boshi* 墓誌), but it is in fact a part of a bronze container that served as the outer case that held a silver reliquary in the shape of an ewer (*sharihei* 舍利瓶) that held the remains of Gyōki. It is now an inverse triangle 10.7 centimeters in height on whose surface 18 Chinese characters are incised. Through an analysis and examination of this small fragment, this article considers those who created Gyōki's tomb and his followers in general (who were said to have numbered over 3000).

According to an examination of the fragment of the epitaph by fluorescent x-ray analysis, the metallic content is approximately copper 85%, tin 1.5%, arsenic 4.1%, and lead 6.2%; gold was only detected on the surface, demonstrating that it is characterized by having a relatively high lead content. Many air bubbles were observed in a cross section, and as these are flaws that lessen the metal's strength, it is clear that the metal-casting technique was not advanced. Moreover, I confirmed that the characters were incised with a chisel after it was gilded, which is the opposite of the normal process used for epitaphs and in metalworking.

As for comparative source materials, when the fragments of the halo-like mandorla (Jpn. *kōhai*) of the principal icon of the Nigatsudō hall at Tōdai-ji temple (in the collection of Nara National Museum) were analyzed, they proved to be nearly pure copper, with copper making up 92.5% of the constituent metal. There were no air bubbles in a cross section, and it was confirmed that the incisions were made after the gilding process, as was the standard practice at the time. It is clearly unlike the fragment of the epitaph of Gyōki. The chief icon of the Nigatsudō was produced by a state workshop charged with repairing Tōdaiji, and in contrast we can hypothesize that the fragment of epitaph of Gyōki was produced in a private workshop.

A record states that the tomb of Gyōki had a large stone case containing a bronze container, gilt-bronze container, and a silver reliquary in the shape of an ewer. This four-fold structure and careful burial was not merely that of a tomb, but matched the foundation of a stupa to enshrine a Buddha relic. I surmise that that the disciples of Gyōki devised it, keeping in mind the enshrining of Buddha relics in pagodas during the 7th century. Furthermore, in the construction of the substantial containers, we can imagine the investment of assets and technology by a wealthy local clan that worshiped Gyōki as a bodhisattva. The Sugawara-dera where Gyōki met his end was a temple constructed in the territorial base of the Haji clan. The Haji were a clan that had been involved in the construction of tombs and pottery, and it can be hypothesized that their technology may have also been used in the construction of Gyōki's tomb.

奈良国立博物館研究紀要

鹿園雜集

第二十一号

平成三十一年四月三十日発行

編集発行 奈良国立博物館

〒630-8233

奈良市登大路町五〇番地

印刷・製本

株式会社天理時報社
天理市稲葉町八〇番地